

# 微笑

横光利一

青空文庫



次の日曜には甲斐<sup>かい</sup>へ行こう。新緑はそれは美しい。そんな会話が擦れ違う声の中からふと聞えた。そうだ。もう新緑になると梶<sup>かじ</sup>は思った。季節を忘れるなどということは、ここしばらくの彼には無いことだった。昨夜もラジオを聞いていると、街の探訪放送で、脳病院から精神病患者との一問一答が聞えて来た。そして、終りに精神科の医者<sup>いしや</sup>の記者に云うには、

「まあ、こんな患者は、今は珍らしいことではありません。人間が十人集れば、一人ぐらいは、狂人が混じっていると思つても、宜<sup>よろ</sup>しいでしょう。」

「そうすると、今の日本には、少しおかしいのが、五百万人ぐら

いはいると思つても、さしつかえありませんね、あははははは

——

笑う声が薄気味わるく夜の灯火の底でゆらめいていた。五百万人の狂人の群れが、あるいは今一斉にこうして笑っているのかしれない。尋常ではない声だった。

「あははははは……」

長く尾をひくこの笑い声を、梶は自分もしばらく胸中にえがいてみていた。すると、しだいにあはははがげらげらに変つて来て、人間の声ではもうなかつた。何ものか人間の中に混じっている声だった。

自分を狂人と思うことは、なかなか人にはこれは難しいことで

ある。そうではないと思うよりは、難しいことであると梶は思った。それにしても、いまも梶には分らぬことが一つあった。人間は誰でも少しは狂人を自分の中に持っているものだという名言は、忘れられないことの一つだが、中でもこれは、かき消えていく多くの記憶の中で、ますます鮮明に膨れあがって来る一種異様な記憶であった。

それも新緑の噴き出て来た晩春のある日のことだ。

「色紙を一枚あなたに書いてほしいという青年がいるんですが、よろしければ、一つ——」

知人の高田が梶の所へ来て、よく云われるそんな注文を梶に出した。別に稀まれな出来事ではなかったが、このときに限って、いつ

もと違う特別な興味を覚えて梶は筆を執った。それというのも、まだ知らぬその青年について、高田の説明が意外な興味を呼び起させるものだったからである。青年は栖<sup>せいほう</sup>方<sup>ほう</sup>といつて俳号を用いている。栖方は俳人の高田の弟子で、まだ二十一歳になる帝大の学生であつた。専攻は数学で、異常な数学の天才だという説明もあり、現在は横須賀の海軍へ研究生として引き抜かれて詰めていくという。

「もう周囲が海軍の軍人と憲兵ばかりで、息が出来ないらしいのですよ。だもんだから、こつそり脱け出して遊びに来るにも、俳号で来るので、本名は誰にもいえないのです。まア、斎藤といつておきますが、これも仮名ですから、そのおつもりで。」

高田はそう梶に云つてから、この栖方は、特種な武器の発明を三種類も完成させ、いま最後の一つの、これさえ出来れば、勝利は絶対的確實だといわれる作品の仕上げにかかっている、とも云つたりした。このような話の真実性は、感覚の特殊に鋭敏な高田としても確証の仕様もない、ただの噂うわさの程度を正直に梶かじに伝えていだけであることは分つていた。しかし、戦局は全面的に日本の敗色に傾いている空襲直前の、新緑のころである。噂にしても、誰も明るい噂うわさに餓うえかつているときだった。細やかな人情家の高田のひき緊しまつた喜びは、勿論もちろん梶をも揺り動かした。

「どんな武器ですかね。」

「さア、それは大変なものらしいのですが、二三日したらお宅へ

本人が何うといつてましたから、そのときでも訊いて下さい。」

「何んだろう。噂の原子爆弾というやつかな。」

「そうでもないらしいです。何んでも、凄<sup>すご</sup>い光線らしい話でしたよ。よく私も知りませんが、——」

負け傾いて来ている大斜面を、再びぐつと匆<sup>は</sup>ね起き返すある一つの見えない力、というものが、もしあるのなら誰しも欲しかった。しかし、そういう物の一つも見えない水平線の彼方に、ぽつと射<sup>さ</sup>し露<sup>あら</sup>われて来た一縷<sup>いちる</sup>の光線に似たうす光が、あるいはそれとともに梶は思った。それは夢のような幻影としても、負け苦しむ幻影より喜び勝ちたい幻影の方が強力に梶を支配していた。祖国ギリシヤの敗戦のとき、シラクサの城壁に迫るローマの大艦隊を、

錨いかりで釣り上げ投げつける起重機や、敵船体を焼きつける鏡の発明に夢中になったアルキメデスの姿を梶はその青年栖せいほう方の姿に似せて空想した。

「それにはまた、物凄い青年が出てきたものだなア。」と梶は云つて感嘆した。

「それも可愛いところのある人ですよ。発明は夜中にするらしくて、大きな音を立てるものだから、どこの下宿屋からも抛ほうり出されましてね。今度の下宿には娘がいるから、今度だけは良さそうだ、なんて云つてました。学位論文も通つたらしいです。」

「じゃ、二十一歳の博士か。そんな若い博士は初めてでしょう。」  
「そんなことも云つてました。通つた論文も、アインシュタイン

の相対性原理の間違いを指摘したものだと言っていましたかね。」

異才の弟子の能力に高田も謙遜けんそんした表情で、誇張を避けようと努めている苦心を梶は感じ、先まずそこに信用が置かれた気持良  
い一日となつて来た。

「ときどきはそんな話もなくしては困るね。もう悪いことばかりだからなア。たった一日でも良いから、頭の晴れた日が欲しいものだ。」

梶の幻影は疑いなくそのような気持から忍び込み、ひろが拡り始めたようだった。とにかく、祖国を敗亡から救うかもしれない一人の巨人が、いま、梶の身边にうろろうろし始めたということは、彼の生涯の大事件だと思えば思えた。それも、今の高田の話そのもの

だけを事実としてみれば、希望と幻影は同じものだった。

「しかし、そんな青年が今ごろ僕の色紙を欲しがると、おかしいね。そんなものじゃないだろう。」

と梶は云った。そして、そう思いもした。

「けれども、何といつても、まだ小供こどもですよ。あなたの色紙を貰つてくれというのは、何んでも数学をやる友人の中に、あなたの家の標札を盗んで持つてるものがいるので、よし、おれは色紙を貰つて見せると、ついそう云つてしまつたらしいのです。」

梶は十年前も前、自宅の標札をかけてもかけても脱はずされたころの日のことを思い出した。長くて標札は三日と保もたなかつた。その日のうちに取られたのも二三あつた。郵便配達からは小言の食い

づめにあつた。それからは固く釘で打ちつけたが、それでも門標はすぐ剥がされた。この小事件は当時梶一家の神経を悩ましていた。それだけ、今ごろ標札のかわりに色紙を欲しがる青年の戯れに実感がこもり、梶には、他人事では<sup>ひとごと</sup>ない直接的な繋がり<sup>つな</sup>を身に感じた。当時の悩みの種が意外なところへ落ちていて、いつの間にかそこで葉を伸ばしていたのである。彼は一日も早く栖方に会つてみたくなつた。おそるべき青年たちの一塊をさし覗いて、彼らの悩み、——それもみな数学者のさなぎが羽根を伸ばすに必要<sup>のぞ</sup>な、何か食い散らす葉の一枚となつていた自分の標札を思うと、さなぎの顔の悩みを見たかつた。そして、梶自身の愁いの色をそれと比べて見ることは、失われた門標の、彼を映し返してみせて

くれる偶然の意義でもあった。

ある日の午後、梶の家の門から玄関までの石畳が靴を響かせて来た。石に鳴る靴音の加減で、梶は来る人の用件のおよその判定をつける癖があった。石は意志を現す、とそんな冗談をいうほどまでに、彼は、長年の生活のうちこの石からさまざまな音響の種類を教えられたが、これはまことに恐るべき石畳の神秘的な能力だと思ふようになって来たのも最近のことである。何かそこには電磁作用が行われるものらしい石の鳴り方は、その日は、一種異様な響きを梶に伝えた。ひどく格調のある正確なひびきであった。それは二人づれの音響であったが、四つの足音の響き具合はぴた

りと合い、乱れた不安や懷疑の重さ、孤独な低迷のさまなどいつも聞きつける足音とは違っている。全身に溢れた力が漲りつつ、頂点で廻かいてん転てんしている透明なひびきであつた。

梶は立つた。が、またすぐ坐すわり直し、玄関の戸を開け加減の音を聞いていた。この戸の音と足音と一致していないときは、梶は自分から出て行かない習慣があつたからである。間もなく戸が開けられた。

「御免下さい。」

初めから声まで今日の客は、すべて一貫したりズムがあつた。

梶が出て行ってみると、そこに高田が立っていて、そしてその後帝大の学帽を冠かぶつた青年が、これも高田と似た微笑を二つ重ね

て立っていた。

「どうぞ。」

とうとう門標が戻つて来た。どこを今までうろつき廻つて来たものやら、と、梶は応接室である懐しい明るさに満たされた気持で、青年と対いあつた。高田は梶に栖方の名を云つて初対面の紹介をした。

学帽を脱いだ栖方はまだ少年の面影をもつていた。街街の一隅を馳け廻っている、いくら悪戯をしても叱れない墨を顔につけた腕白な少年がいるものだが、栖方はそんな少年の姿をしている。郊外電車の改札口で、乗客をほつたらかし、鋏をかちかち鳴らしながら同僚を追つ馳け廻している切符きり、と云つた青年であつ

た。

「お話をきくと毎日が大変らしいようですね。」

先ずそんなことから梶は云った。栖方は黙ったまま笑った。ぱツと音立てて朝開く花の割れ咲くような笑顔だった。赤児が初めて笑い出すえくぼ囁のような、消えやすい笑いだ。この少年が博士になったとは、どう思ってみても梶にはうなず領けないことだったが、笑顔にあらわ顕れてかき消える瞬間の美しさは、その他の疑いなどどうでも良くなる、真ま似ね手てのない無邪気な笑顔だった。梶は学問上の彼の苦しみや発明の辛苦の工程など、栖方から訊き出す気持はなくなつた。また、そんなことはたず訊ねても梶には分りそうにも思えなかつた。

「お郷里はどちらです。」

「A県です。」

ぱつと笑う。

「僕の家内もそちらには近い方ですよ。」

「どちらです。」と栖方は訊ねた。

T市だと梶が答えると、それではY温泉の松屋を知っているかとまた栖方は訊ねた。知っているばかりではない。その宿屋は梶たち一家が行く度によく泊った宿であつた。それを云うと、栖方は、

「あれは小父の家です。」

と云つて、またぱつと笑つた。茶を煎れて来た梶の妻は、栖

せいほ

方うの小父の松屋の話が出てからは忽たちまち二人は特別に親しくなつた。その地方の細かい双そうほう方の話題が暫しばらく高田と梶とを捨てて賑にぎやかになつていくうちに、とうとう梶方は自分のことを、田舎言葉まる出しで、「おれのう。」と梶の妻に云い出したりした。

「もうすぐ空襲が始まるそうですが、恐こわいですわね。」と梶の妻が云うと、「一機も入れない」と梶方は云つてまたぱツと笑つた。

このような談笑の話と、先日高田が来たときの話を綜そうごう合してみた彼の経歴は、二十一歳の青年にしては複雑であつた。中学は首席で柔道は初段、数学の検定を四年のときにとつた彼は、すぐまた一高の理科に入学した。二年のとき数学上の意見の違いで教師と争い退校させられてから、徴用でラバアウルの方へやられた。

そして、ふたたび帰って帝大に入学したが、その入学には彼の才能を惜しんだある有力者の力が働いていたようだった。この間、栖方の家庭上にはこの若者を悩まして一つの悲劇があった。それは、母の実家が代代の勤皇家であるところへ、父が左翼で獄に入ったため、籍もろとも実家の方が栖方母子二人を奪い返してしまったことである。父母の別れていることは絶ちがたい栖方のひそかな悩みであった。しかし、梶はこの栖方の家庭上の悩みには話題を触れさせたくはなかった。勤皇と左翼の争いは、日本の中心問題で、触れれば、忽ち物狂わしい渦巻に巻き襲われるからである。それは数学の排中律に似た解決困難な問題だった。栖方は、その中心の渦中に身をひそめて呼吸をして来たのであってみ

れば、父と母との争いのどちらに想いおもをめぐらせるべきか、という相反する父母二つの思想体系にもみぬかれた、彼の若若しい精神の苦しみは、想像にかたくない。同一の問題に真理が二つあり、一方を真理とすれば他の方が怪しく崩れ、二つを同時に真理とすれば、同時に二つが嘘うそとなる。そして、この二つの中間の真理というものはあり得ないという数学上の排中律の苦しみは、栖方にとっては、父と母と子との間の問題に変わっていた。

しかし、勤皇と左翼のことは別にしても、人の頭をつらぬく排中律の含んだこの確率だけは、ただ単に栖方一人にとっての問題でもない。実は、地上で争うものの、誰の頭上にも降りかかって来ている精神に關した問題であつた。これから頭を反らし、そ知

らぬ表情をとることは、要するに、それはすべてが偽せものたるべき素質をもつことを証明しているがごときものだった。実に静静とした美しきで、そして、いつの間にかすべてをずり落して去っていく、恐るべき魔のような難題中のこの難題を、梶とて今、この若い栖方の頭に詰めより打ち降ろすことは忍びなかった。いや、梶自身としてみても自分の頭を打ち割ることだ。いや、世界もまた——しかし、現に世界はあるのだ。そして、争っているのだった。真理はどこかになければならぬ筈はずにもかかわらず、争いだけが真理の相貌そうぼうを呈しているという解きがたい謎なぞの中で、訓練をもった暴力が、ただその訓練のために輝きを放って白熱している。

「いったい、それは、眼にするすべてが幽霊だということか。——手に触れる感覚までも、これは幽霊ではないとどうしてそれを証明することが出来るのだ。」

ときには、斬り落された首が、ただそのまま引っ付いているだけで、知らずに動いている人間のような、こんな怪しげな幻影も、梶には泛<sup>うか</sup>んで来ることがあつたりした。われ有るに非<sup>あ</sup>ざれど、この痛みどこより来るか。古人の悩んだこんな悩ましさも、十数年来まだ梶から取り去られていかなかった。そして、戦争が敗北に終わろうと、勝利になろうと、同様に続いて変らぬ排中律の生みつづけていく難問たることに変りはない。

「あなたの光線は、威力はどれほどのものですか。」

梶が栖方に訊ねてみようかと思ったのも、何かこのとき、ふと気がかりなことがあつて、思いとまつた。

「ドイツの使い始めたV一号というのも、初めは少年が発明したとかいうことですね。何んでも僕の聞いたところでは、世界の数学界の実力は、年齢が二十歳から二十三四歳までの青年が握つていて、それも、半年ごとに中心の実力が次ぎのものに變つていく、という話を、ある数学者から聞いたことがあります。日本は、日本の数学も、実際はそんなところにありますかね。どうです。」

君自身がいまそれか、と暗に訊ねたつもりは梶の質問に、栖方は、ぱつと開く微笑で黙つて答えただけだった。梶はまたすぐ、新武器のことについて訊きたい誘惑を感じたが、国家の秘密に栖

方を誘いこみ、口を割らせて彼を危険にさらすことは、飽くまで避けて通らねばならぬ。狭い間道をくぐる思いで、梶は質問の口を探しつづけた。

「俳句は古くからですか。」

これなら無事だ、と思われる安全な道が、突然二人の前に開けて来た。

「いえ、最近です。」

「好きなんですね。」

「おれのう、頭の休まる法はないものかと、いつも考えていたときですが、高田さんの俳句をある雑誌で見つけて、さっそく入門したのです。もう僕を助けてくれているのは、俳句だけです。他

のことは、何をしても苦しめるばかりですね。もう、ほッとして  
」。

青葉に射し込さもっている光を見ながら、安らかに笑っている栖  
方の前で、梶は、もうこの青年に重要なことは何に一つ訊けない  
のだと思った。有象無象うぞうむぞうの大群衆を生かすか殺すか彼一人の頭  
にかかっている。これは眼前の事実であろうか、夢であろうか。と  
にかく、事はあまりに重大すぎて想像に伴なう実感が梶には起ら  
なかった。

「しかし、君がそうして自由に外出できるところを見ると、まだ  
看視はそれほど厳しくないのですね。」と梶は訊ねた。

「厳しいですよ。俳句のことで出るといふときだけ、許可してく

れるのです。下宿屋全部の部屋が憲兵ばかりで、ぐるりと僕一人の部屋を取り包んでいるものですから、勝手なことの出来るのは、俳句だけです。もう堪<sup>たま</sup>らない。今日も憲兵がついて来たのですが、句会があるからと云って、品川で撒<sup>ま</sup>いちゃいました。」

帰ってから憲兵への口実となる色紙の必要なことも、それで分った。梶は、自分の色紙が栖方の危険を救うだけ、自分へ疑惑のかかるのも感じたが、門標につながる縁もあつて彼は栖方に色紙を書いた。

「科学上のことはよく僕には分らなくて、残念だが、今は秘密の奪い合いだから、君も相当に危いですね、気をつけなくちゃ。」

「そうです。先日も優秀な技師がピストルでやられました。それ

は優秀な人でしたがね。一度横須賀に来てみて下さい。僕らの工場をお見せしますから。」

「いや、そんな所を見せて貰っても、僕には分らないし、知らない方がいいですよ。あなたにこれでお訊ねしたいことが沢山あるが、もう全部やめです。それより、アインシュタインの間違いつて、それは何んですか。」

「あれは仮設が間違っているのですよ。仮設から仮設へ渡っているのがアインシュタインの原理ですから、最初の仮設を叩いてみたら、他がみな弛ゆるんでしまつて——」

空中楼阁を描く夢はアインシュタインとて持ったであろうが、いまそれが、この栖方の検閲にあつて礎石を覆えされているとは、

これもあまりに大事件である。梶にはも早や話が続かなかつた。栖方を狂人と見るには、まだ栖方の応答のどこ一つにも狂いはなかつた。

「君の数学は独創ばかりのような感じがするが、君は零ゼロの観念をどんな風に思うんです。君の数学では。僕は零ゼロが肝心だと思うんだが、どうですか。」

「そこですよ。」 栖方せいほうはひどく乗り出す風に早口になって笑つた。「おれのは、みんなそこからです。誰一人分つてくれない。この間も、それで喧嘩けんかをしたのですが、日本の軍艦も船も、みな間違っているのです。船体の計算に誤算があるので、おれはそれを直してみたのですが、おれの云うようにすれば、六ノット速力

が迅はやくなる、そういくら云つても、誰も聞いてはくれないのですよ。あの船体の曲り具合のところですよ。その零の置きどころが間違っているのです。」

誰も判定のつきかねる所で、栖方はただ一人孤独な闘いをつづけているようだった。殊に、零点の置きどころを改革するというような、いわば、既成の仮設や単一性を抹殺まっさつしていく無謀さには、今さら誰も応じるわけにはいくまいと思われる。しかし、すでに、それだけでも栖方の発想には天才の資格があった。二十一歳の青年で、零の置きどころに意識をさし入れたということとは、あらゆる既成の觀念に疑問を抱いた証拠であった。おそらく、彼を認めるものはいなかりと梶かじは思った。

「通ることがありますか。あなたの主張は。」と梶は訊ねた。

「なかなか通りませんね。それでも、船のことはとうとう勝つて通りました。学者はみんな僕をやつつけるんだけれども、おれは、証明してみせて云うんですから、仕方がないでしょう。これから船は速度が速くなりますよ。」

どうでも良いことばかり雲集している世の中で、これだけはと  
思う一点を、射し動かして進行している鋭い頭脳の前で、大人た  
ちの営営とした間抜けた無駄骨折りが、山のように梶には見えた。  
「いっぺん工場を見に来てください。御案内しますから。面白い  
ですよ。俳句の先生が来たんだからといえ、許可してくれませ  
う。」  
「栖方は、梶が武器に関する質問をしないのが不服らしく、梶

の黙っている表情に注意して云った。

「いや、それだけは見たくないな了。」と梶は答えを洩った。

栖方は一層不満らしく黙っていた。前後を通じて栖方が梶に不満な表情を示したのは、このときだけだった。

「そんなところを見せてもらっても、僕には何の益にもならんからね。見たって分らないんだもの。」

これは少し残酷だと梶は思いもした。しかし、梶には、物の根こ柢んていを動かさしつづけている栖方の世界に対する、云いがたい苦痛を感じたからである。この梶の一瞬の感情には、喜怒哀楽のすべてが籠こもっていたようだった。便便として為すところなき梶自身の無力さに対する嫌悪や、栖方の世界に刃向う敵意や、殺人機の製

造を目撃する淋しさや、勝利への予想に興奮する疲労や、——いや、見ないに越したことはない、と梶は思った。そして、栖方の云うままには動けぬ自分の嫉妬しつとが淋しかった。何となく、梶は栖方の努力のすべてを否定している自分の態度が淋しかった。

「君、排中律をどう思いますかね、僕の仕事で、いまこれが一番問題なんだが。」

梶は、問うまいと思っていたことも、ついこんなに、話題を外そらせたくなつて彼を見た。すると、栖方は「あッ、」と小声の叫びをあげて、前方の棚の上に廻かいてん転している扇風機を指差した。

「零点五だッ。」

閃ひらめくような栖方の答えは、勿もちろん論、このとき梶には分らなか

った。しかし、梶は、訊きき返すことはしなかった。その瞬間の栖方の動作は、たしかに何かに驚きを感じたらしかつたが、そつとそのまま梶は栖方をそこに沈めて置きたかつた。

「あの扇風機まわの中心は零でしょう。中の羽根は廻まわつていて見えませんが、ちよつと眼はを脱はずして見た瞬間だけ、ちらりと見えますね。あの零から、見えるところまでの距離の率つぽですよ。」

間髪を入れぬ栖方の説明は、梶の質問の壺つぽには落ち込んで来なかつたが、いきなり、廻転している眼前の扇風機をひつ掴つかんで、投げつけたようなこの栖方の早業には、梶も身を翻すべす術がなかつた。

「その手で君は発明をするんだな。」

「おれのう、街を歩いていると、石に躓つまずいてぶつ倒れたんです。そしたら、横を通っていた電車の下っ腹から、火の噴ついてるのが見えたんですよ。それから、家へ帰って、ラジオを点つけようと思つて、スイッチをひねつたところが、ぼつと鳴つて、そのまま何の音も聞えないんです。それで、電車の火と、ラジオのぼつといつただけの音とを結びつけてみて、考え出したのですよ。それが僕の光線です。」

この発想も非凡だった。しかし、梶はそこで、急いで栖方の口を絞しめさせたかった。それ以上の発言は栖方の生命にかかわるところである。青年は危険の限界を知らぬものだ。栖方も梶の知らぬところで、その限界を踏みぬいている様子があつたが、注意する

には早や遅すぎる疑いも梶には起つた。

「倒れたのが発想か。倒れなかつたら、何にもないわけだな。」

これもすべてが零からだ梶は思つて云つた。彼は栖方が気の毒で堪たまらなかつた。

その日から梶は栖方の光線が気にかかつた。それにしても、彼の云つたことが事実だとすれば、栖方の生命は風前の灯ともしび火だど梶は思つた。いつたい、どこか一つとして危険でないとところがあるだろうか。梶はそんなに反対の安全率の面から探してみた。絶えず隙間すきまを狙ねらう兇器の群れや、嫉視しつしちゆうし中傷しょうの起す焰ほのおは何を謀たくらむか知れたものでもない。もし戦争が敗まけたとすれば、その日のう

ちに銃殺されることも必定である。もし勝ったとしても、用がすめば、そんな危険な人物を人は生かして置くものだろうか。いや、危い。と梶はまた思った。この危険から身を防ぐためには——梶はその方法をも考えてみたが、すべての人間を善人と解さぬ限り、何もなかった。

しかし、このような暗澹あんたんとした空気かかわに拘からず、栖方の笑顔を思い出すと、光がぼつと射し展ひらいているようで明るかった。彼の表情のどこ一点にも愁いの影はなかった。何ものか見えないものに守護とされている貴とおとさが溢あふれていた。

ある日、また栖方は高田と一緒に梶の家へ訪ねて来た。この日は白い海軍中尉の服装で短剣をつけている彼の姿は、前より幾ら

か大人に見えたが、それでも中尉の肩章はまだ栖方に似合っていないなかった。

「君はいままで、危いことが度度あつたでしょう。例えば、今思つてもぞつとするとというようなことで、運よく生命が助かつたというようなことですがね。」と、梶は、あの思惑から話半ばに栖方に訊ねてみた。

「それはもう、随分ありました。最初に海軍の研究所へ連れられて来たその日にも、ありました。」

栖方はそう答えてその日のことを手短かに話した。研究所へ着くなり栖方は新しい戦闘機の試験飛行に乗せられ、急直下するその途中で、機の性能計算を命ぜられたことがあつた。すると、急に

そのとき腹痛が起り、どうしても今日だけは赦ゆるして貰もらいたいと栖方は歎願たんがんした。軍では時日を変更することは出来ない。そこで、その日は栖方を除いたものだけで試験飛行を実行した。見ていると、大空から急降下爆撃で垂直に下って来た新飛行機は、栖方の眼前で、空中分解をし、ずぼりと海中へ突き込んだそのまま、ことごとく死んでしまった。

また別の話で、ラバアウルへ行く飛行中、操縦席からサンドウイツチを差し出してくれたときのこと、栖方は身を斜めに傾けて手を延ばしたその瞬間、敵弾が飛んで来た。そして、彼にあた的あらず、後ろのものが胸を撃ち貫かれて即死した。

また別の第三の偶然事、これは一番栖せいほう方ほうらしく梶かじには興味が

あつたが、——少年の日のこと、まだ栖方は小学校の生徒で、朝学校へ行く途中、その日は母が栖方と一緒にあつた。雪のふかく降りつもっている路を歩いてるとき、一羽の小鳥が飛んで来て彼の周囲を舞い歩いた。少年の栖方はそれが面白かつた。両手で小鳥を掴つかもうとして追っかける度に、小鳥は身を翻して、いつまでも飛び廻まわつた。

「おれのう、もう掴まるか、もう掴まるかと思つて、両手で鳥を抑おさえると、ひよいひよいと、うまい具合に鳥は逃げるんです。それで、とうとう学校が遅れて、着いてみたら、大雪を冠かぶつたおれの教室は、雪崩でぺちゃんこに潰つぶれて、中の生徒はみな死んでいました。もう少し僕が早かつたら、僕も一緒にでした。」

栖方は後で母にその小鳥の話をする、そんな鳥なんかどこにもいなかったと母は云ったそうである。梶は訊きいていて、この栖方の最後の話はたとい作り話としても、すつきり抜けあがった佳作だと思つた。

「鳥飛んで鳥に似たり、という詩が道元どうげんにあるが、君の話も道元に似てますね。」

梶は安心した気持でそんな冗談を云つたりした。西日の射さこみ始めた窓の外で、一枚の木製の簾すだれが垂たれていた。栖方はそれを見ながら、

「先日お宅から帰ってから、どうしても眠れないのですよ。あの簾が眼について。」と云つて、なお彼は窓の外を見つづけた。

「僕はあの簾の横板が幾つあったか忘れたので、それを思い出さうとしても、幾ら考えても分らないのですよ。もう気が狂いそうになりましたが、とうとう分った。やっぱり合つてた。二十二枚だ。」栖方は嬉しうれそうに笑顔だつた。

「そんなことに気がつき出しちや、そりや、たまらないなア。」一人いるときの栖方の苦痛は、もう自分には分らぬものだと思つて云つた。

「夢の中で数学の問題を解くというようなことは、よくあるんでしようね。先日もクロネツカアという数学者が夢の中で考えついたという、青春の論理とかいう定理の話聞いたが、——」

「もうしよつちゆうです。この間も朝起きてみたら、机の上におむ

つかしい計算がいつぱい書いてあるので、下宿の婆さんにこれだれが書いたんだと訊いたら、あなたが夕べ書いてたじゃありませんかというんです。僕はちつとも知らないんですがね。」

「じゃ、気狂い扱いにされるでしょう。」

「どうも、そう思ってるらしいですよ。」 栖方はまた眼を上げて、ぱツと笑った。

それでは今日は栖方の休日になろうと云うことになって、それから梶たち三人は句を作った。青葉の色のにじむ方に顔を向けた栖方は、「わが影を逐おいゆく鳥や山ななめ」という幾何学的な無季の句をすぐ作った。そして葉山の山の斜面に鳥の迫まつていった四月の囁しよくもく目だと説明した。高田の鋭く光る眼まなざし差が、この日

も弟子を前へ押し出す謙抑けんよくな態度で、句会の場数を踏んだ彼のこころづか心遣いもよくうかがわれた。

「三たび茶を戴いたく菊の薫かおりかな」

高田の作つたこの句も、客人の古風に昂たかまる感情を締め抑えた清秀な気分があつた。梶は佳よい日の午後だと喜んだ。出て来た梶の妻も食べ物の無くなつた日の詫わびを云つてから、胡瓜きゅうりもみを出した。栖方は、梶の妻と地方の言葉で話すのが、何より慰まる風らしかつた。そして、さつそく色紙へ、

「方言のなまりなつかし胡瓜もみ」という句を書きつけたりした。

栖方たちが帰っていつてから十数日たったある日、また高田ひ

とりが梶のところへ来た。この日の高田は凋しおれていた。そして、梶に、昨日きのう憲兵が来ていうには、栖方は発狂しているから彼の云いふらして歩くこと一切を信用しないでくれと、そんな注意を与えて帰ったということだった。

「それで、栖方の歩いたところへは、皆にそう云うよう、という話でしたから、お宅へもちよつとそのことをお伝えしたいと思いましてね。」

一撃を喰くらった感じで梶は高田と一緒にしばらく沈んだ。みな栖方の云ったことは嘘うそだったのだろうか。それとも、——彼を狂人にして置かねばならぬ憲兵たちの作略の苦心は、栖方のためかもしれないと思つた。

「君、あの青年を僕らも狂人としておこうじゃないですか。その方が本人のためにはいい。」と梶は云った。

「そうですね。」高田は垂れ下っていくような元氣の失<sup>う</sup>せた声を出した。

「そうしところ。その方がいいよ。」

高田は栖方を紹介した責任を感じて詫<sup>わ</sup>びる風に、梶について掲<sup>か</sup>つては来なかつた。梶も、ともすると沈<sup>し</sup>もうとする自分が怪<sup>あ</sup>しまれて来るのだった。

「だって君、あの青年は狂人に見えるよ。またそうかも知れないが、とにかく、もし狂人に見えなかつたなら、栖方君は危<sup>あ</sup>いよ。あるいはそう見えるように、僕ならするかもしれないね。君だつ

てそうでしよう。」

「そうですね。でも、何んだか、みなあれは、科学者の夢なんじやないかと思えますよ。」高田はあくまで喜ぶ様子もなく、その日は一日重く黙り通した。

高田が帰ってから、梶は、今まで事実無根のことを信じていたのは、高田を信用していた結果多大だと思つたが、それにしても、梶、高田、憲兵たち、それぞれ三様の姿態で栖方を見ているのは、三つの零ゼロの置きどころを違たがえている観察のようだった。

一切が空虚だった。そう思うと、俄にわかに、そのように見えて来る空むなしかった一ヶ月の緊張の溶け崩れた気怠けだるさで、いつか彼は空を見上げていた。

残念でもあり、ほつとした安心もあり、すべ迂り落ちていく暗さもあつた。明日からまたこうして頼りもない日を迎えねばならぬ——しかし、ふと、どうしてこんなとき人は空を見上げるものだろうか、と梶は思った。それは生理的に実に自然に空を見上げていたのだつた。円い、何もない、ふかぶかとした空を。——

高田の来た日から二日目に、栖方から梶へ手紙が来た。それには、ただ今天皇陛下からはいえつ拝謁の御沙汰がござたあつてさんだい参内して来ましたが、私に代つて東大総長がみなお答えして下さいました。近日中御報告に是非御伺いしたいと思つております。とそれだけ書いて

あつた。栖方のことは当然忘れていたと思つていた折、梶は多少この栖方の手紙に後ろへ戻る煩わしさを感じ、忙しそうな彼の字体を眺めていた。すると、その翌日栖方は一人で梶の所へ来た。

「参内したんですか。」

「ええ、何もお答え出来ないですよ。言葉が出て来ないので。一度僕の傍まで来られて、それから自分のお席へ戻られました。足数だけ算かぞえていますと、十一歩でした。五メートルです。そうすると、みすが下りまして、その対むこうから御質問になるのです。」

ぱつといつもの美しい微笑が開いた。この栖方の無邪気な微笑にあうと、梶は他の一切のことなどどうでも良くなるのだつた。

栖方の行為や仕事や、また、彼が狂人であろうと偽せものであろ

うと、そんなことより、栖方の頬ほおに泛うかぶ次の微笑を梶は待ちのぞむ気持で話をすすめた。何よりその微笑だけを見たかった。

「陛下は君の名を何とお呼びになるの。」

「中尉は、と仰おっしゃ言いましたよ。それからおつて沙汰さたする、と最後に仰おっしゃ言いました。おれのう、もう頭がぼツとして来て、気狂いになるんじゃないかと思ひましたよ。どうも、あれからちよつとおかしいですよ。」

栖方せいほうは眼をぱちぱちさせ、云うことを聞かなくなつた自分の頭を撫なでながら、不思議そうに云つた。

「それはお芽出めでたいことだつたな。用心をしないと、気狂いになるかもしれないね。」

梶<sup>かじ</sup>はそう云う自分が栖方を狂人と思つて話しているのかどうか、それがどうにも分らなかつた。すべて眞実だと思えば眞実であつた。嘘<sup>うそ</sup>だと思えばまた<sup>ことごと</sup>尽く嘘に見えた。そして、この怪しむべきことが何の怪しむべきことでもない、さつぱりしたこの場のただ一つの眞実だつた。排中律のまつただ中に<sup>うか</sup>泛んだ、ただ一つの直感の眞実は、こうしていま梶に見事な実例を示してくれていて、「さア、どうだ、どうだ。返答しろ。」と梶に迫つて来ているよ。うなものだつた。それにも<sup>かかわ</sup>拘らず、まだ梶は黙つていたのである。「見たままのことさ、おれは微笑を信じるだけだ。」と、こう梶は不精に答えてみたものの、何ものにか、巧みに転がされころころ<sup>ほんろう</sup>翻弄されているのも同様だつた。

「今日お伺いしたのは、一度御馳走ごちそうしたいのですよ。一緒にこれから行つてくれませんか。自動車を渋谷の駅に待たせてあるので。」と、栖方は云つた。

「今ごろ御馳走を食べさすようなところ、あるんですか。」

「すいこうしゃ水交社です。」

「なるほど、君は海軍だったんですね。」と、梶は、今日は学生服ではない栖方の開襟服の肩章を見て笑つた。

「今日はおれ、大尉の肩章をつけてるけれど、本当はもう少佐なんですよ。あんまり若く見えるので、下げてるんです。」

少年に見える栖方のまだ肩章の星数を喜ぶ様子が、不自然ではなかつた。それにしても、この少年が祖国の危急を救う唯一の人

物だとは、——實際、今さし迫っている戦局を有利に導くものがありとすれば、栖方の武器以外にありそうに思えないときだった。しかし、それにしても、この栖方が——幾度も感じた疑問がまたちよつと一寸梶に起つたが、何一つ梶は栖方の云う事件の事実を見たわけではない。また調べる方法とてもない夢だ。彼のいう水交社への出入も栖方一人の夢かどうか、ふと梶はこのとき身を起す氣持になつた。

「君という人は不思議な人だな。初めに君の来たときには、何んだかあしおと登音が普通の客とどこか違つていたように思つたんだが。

——」と梶はつぶや呟くように云つた。

「あ、あのときは、おれ、駅からお宅の玄関まで足数を計つて来

たのですよ。六百五十二歩。」栖方はすぐ答えた。

なるほど、彼の正確な足音の謎はそれなぞで分つた、と梶は思った。

梶は栖方の故郷をA県のみを知っていて、その県のどこかは知らなかつたが、初め来たとき梶は栖方に、君の生家の近くに平田ひらたあ

篤胤つたねの生家がありそうな気がするが、と一言訊くと、このとき

も「百メートル、」と明瞭めいりょうにすぐ答えた。また、海軍との関係

の成立した日の腹痛の翌日、新飛行機の性能実験をやらされたとき、栖方は、垂直に落下して来る機体の中で、そのときでなければ出来ない計算を四度び繰り返した話もした。そして、尾翼に欠点のあることを発見して、「よくなりますよ。あの飛行機は。」と云つたりしたが、氾濫はんらんしつつ彼の頭に襲いかかつて来る数式

の運動に停止を与えることが出来ないなら、栖方の頭も狂わざるを得ないであろうと梶は思った。

正確だから狂うのだ、という逆説は、彼にはたしかに通用する近代の見事な美しさをも語っている。

「君はきようは、水交社から来たんですか。憲兵はついて来っていないの。」と梶は栖方に家を出る前たず訊ねてみた。

「きようは父島から帰ったばかりですよ。その足で来たのです。」  
栖方の発音では父島が千島ちしまと聞えるので、千島へどうしてと梶が訊ね返すと、チチジマと栖方は云い直した。

「実験をすませて来たのですよ。成功しました。一番早く死ぬのは猫ですね。あれはもう、一寸光線をあてると、ころりと逝ゆく。」

その次が犬です。猿はどういうものか少し時間をとりますね。」  
と栖方は低く笑いながら、額ひゃに日灼すじけの条すじの入った頭を痒かいた。  
狂人の寝言のように無雑作むぞうさにそう云うのも、よく聞きわけて見ると、恐るべき光線の秘密を呟つぶやいているのだった。

「僕は動物の心臓というものに興味が出て来ましたよ。どうも、いろいろ心臓に種類があるような気がして来て、これを皆験しらべたら面白いだろうなアと思いました。」

栖方の武器は、事実それなら進行しているのだろうか、と梶は思った。しかし、何ぜだか梶は、ここまで彼と親しくなつて来ていても、それが事実かどうかを栖方に訊き返す気はしなかつた。あまりに面倒で起っている事件は異様すぎて、却かえつて梶に迫力を

与えない。のみならず、どこかで栖方をまだ狂人と思つていころがあつて、何を云つても彼を許しておけるのだつた。

「父島まではどれほどかかるのです。」

「二時間です。あそこの電力は弱いから、実験は思うようには出  
来ないんですよ。それでも、一万フィートぐらいまでなら、効力  
がありますね。初めは海中では駄目だろうと思つていたんですが、  
海水は塩だから、空気中より海中の方が、効力のあることが分り  
ましたよ。」

「へえ、一万フィートなら相当なものだな。うまくゆきますか、  
飛行機だと落ちますね。」

「落ちました。初め操縦士と合図しといて落下傘で飛び降りてか

ら、その後の空虚からの飛行機へ光線をあてたのです。うまくゆきましたよ。操縦士と夕べは握手して、ウイスキーを二人で飲みました。愉快でしたよそのときは。」

自信に満ちた栖方の笑顔は、日常眼にする群衆の憂鬱ゆううつな顔とはおよそかけ放れて晴れていた。

「潜水艦にもかけてみました、これは、うっかりして、後尾へ当っちゃったものだから、浮きあがる筈はずのやつが、いつまでも浮かないんですよ。気の毒なことをした。でも、まあ、仕様がな、国のためだから、我慢をしてもらわなきゃア。」

ちよつと栖方は悲しげな表情になったが、それも忽たちまち晴れあがった。

「日本の潜水艦？」と梶は驚いて訊ねた。

「そうです。いやだったなア、あのときは。もう実験はこりごりだと思いましたがね。あれだからいやになる。」

異様な事件が不思議と真実の相をおびて梶に迫って来始めた。では、みな事実か。この青年の口走っていることは——

「しかし、そんな武器を悪人に持たした日には、事だなア。」と梶は思わず呟いた。

「そうですね。監理が大変です。」

「人類が滅んじまうよ。」

「その武器を積んだ船が六ぱいあれば、ロンドンの敵前上陸が出来ますよ。アメリカなら、この月末にだって上陸は出来ますね。」

もう冗談事ではなかった。どこからどこまで充実した話か依然疑問は残りながらも、一言ごとに栖方の云い方は、空虚なものをじゆうてん充じゆうてん填しつつ淡淡とすすんでいる。梶は自分が驚いているのかどうか、も早やそれも分らなかつた。しかし、どうしてこんな場合まに、不意に悪人のことを自分は考えたのだろうか。たしかに、事は戦争の勝ち敗まけのことだけでは済みそうにないと梶は思った。もちろん勿論、彼は自分が国を愛していることは疑わなかつた。負けることを望むなどとは考えることさえ出来ないことだつた。勝つてもらいたかつた。しかし、勝っている間は、こんなに勝ちつづけて良いものだろうかという愁いがあつた。それが敗まけ色がつづいて襲つて来てみると、愁いどころの騒ぎでは納まらなかつた。戦

争というものの善悪如何にかかわらず祖国の滅亡することは耐えられることではなかった。そこへ出現して来た栖方の新武器は、聞いただけでも胸の躍ることである。それに何故また自分はその武器を手にした悪人のことなど考えるのだろうか。ひやりといちまつ一 抹の不安を覚えるのはどうしたことだろうか。——梶は自分の心中に起つて来たこの二つの真実のどちらに自分の本心があるものか、しばら暫くじつと自分を見るのだった。ここにも排中律の詰めよつて来る悩ましさがうすうすともみ起つて心を刺して来るのだ。先日までは、まだ栖方の新武器が夢だと思っていた先日まで、栖方の生命の安危が心配だったのに、それが事実に近い来てみると、彼のことなども早やどうでも良くなって、悪魔の所

在を嗅ぎつけようとしている自分だということは、——悪魔、たしかににいるのだ。奴は、と梶かじは思った。

「その君の武器は、善人に手渡さなきゃア、国は滅ぶね。もし悪人に渡した日には、そりや、敗けだ。」と、何ぜともなく梶つぶやは呟つぶやいて立ち上った。神います、と彼は文句なくそう思ったのである。

栖方と梶とは外へ出た。西日の射す退ひけどきの渋谷のプラットは、車内から流れ出る客と乗り込む客とで渦巻いていた。その群衆の中に混って、乗るでもない、降りもしない一人の背高い、蒼あおざめた帝大の角帽姿の青年が梶の眼にとまった。憂愁を湛たえた清らかな眼まなこ差は、細く耀かがやきを帯びて空中を見ていたが、栖方を見

ると、つと美しい視線をさけて外方そつぽを向いたまま動かなかった。

「あそこに帝大の生徒がいるでしょう。」

と栖方は梶に云った。

「ふむ。いる。」

「あれは僕の同僚ですよ。やはり海軍詰めですがね。」

群衆の流れのままに二人は、海軍と理科との二つの襟章をつけたその青年の方へ近づいた。

「あッ、黙っているな。敵愾てきがいしん心を感じたかな。」と栖方は云う

と、横を向いた青年の背後を、これもそのまま梶と一緒に過ぎていった。

「もう僕は、憎まれる憎まれる。誰も分つてくれやしない。」と

栖方はまた眩いたが、歩調は一層活澆かっぱつに憂憂かつかつと響いた。並んだ梶は栖方の歩調に染ってリズムカルになりながら、割れているのは群衆だけではないと思った。日本で最も優秀な実験室の中核が割れているのだ。

栖方が待たせてあると云った自動車は、渋谷の広場にはいなかった。そこで二人は都電で六本木まで行くことにしたが、栖方は自動車の番号を梶に告げ、街中で見かけたときはその番号を呼び停とめていつでも乗ってくれと云ったりした。電車の中でも栖方は二十一歳の自分が三十過ぎの下僚を呼びつけにする苦痛を語ってから、こうも云った。

「僕がいま一番尊敬しているのは、僕の使っている三十五の伊豆いず

という下級職工ですよ。これを叱しかるのは、僕には一番辛つらいことですが、影では、どうか何を云つても赦ゆるして貰もらいたい、工場の中だから、君を呼び捨てにしないと他のものが、云うことを聞いてはくれない、国のためだと思つて、当分は赦してほしいと頼んであるんです。これは豪えらい男ですよ。人格も立派です。そこへいくと、僕なんか、伊豆を呼び捨てに出来たもんじゃありませんがね。」

この栖方せかたのどこが狂人なのだろうか、と梶はまた思つた。二十歳で博士になり、少佐の資格で、齡としうえ上の沢山な下僚を呼び捨てに手足のごとく使い、日本人として最高の榮譽を受けようとしている青年の挙動は、栖方を見遁みのがして他に例のあつたためしはない。それなら、これからゆく先の長い年月、栖方は今あるよりも

ただ下るばかりである。何という不幸なことだろう、梶はこの美しい笑顔をやる青年が気の毒でならなかった。

六本木で二人は降りた。橡とちの木の並んだ狸まみ穴あなの通りを歩いたとき、夕暮のせまった街に人影はなかった。そこを坂下からこちらへ十人ばかりの陸軍の兵隊が、重い鉄材を積んだ車を曳ひいて登つて来ると、栖方とまの大尉の襟章を見て、隊長の下士が敬礼すきツと号令した。ぴたツと停とまつた一隊に答礼する栖方とまの挙手は、隙すきなくしつかり板についたものだった。軍隊内の栖方とまの姿を梶は初めて見たと思つた。

「もう君には、学生臭はなくなりましたね。」と梶は云つた。

「僕は海軍より陸軍の方が好きですよ。海軍は階級制度がだらし

なくつて、その点陸軍の方がはつきりしていますからね。僕はいま陸軍から引つ張りに来ているんですが、海軍が許さないのです。

「」

すいこうしゃ

水交社が見えて来た。この海軍将校の集会所へ這入るのは、

梶には初めてであつた。どこの煙筒からも煙の出ないころだつたが、ここの高い煙筒だけ一本濛濛と煙を噴き上げていた。携帯品預所の台の上へ短剣を脱して出した栖方は、剣の柄のところには菊の紋の彫られていることを梶に云つて、

「これ僕んじやないのですが、恩賜の軍刀ですよ。他人のを借りて来たんです。もうじき、僕も貰うもんですから。」

子供らしくそう云いながら、室の入口へ案内した。そこには佐

官以上の室の標札が懸っていた。油の磨きで黒黒とした光沢のある革張りのソファや椅子いすの中で、大尉の栖方は若若しいというより、少年に見える不似合な童顔をにこにこさせ、梶に慰めを与えようとして骨折っているらしかった。食事のときも、集っている将校たちのどの顔も沈鬱ちんうつな表情だったが、栖方だけ一人活いき活いきとし笑顔で、肱ひじを高くビールの壘びんを梶のコツプに傾けた。フライヤサラダの皿が出たとき、

「そんな君の尉官の襟章で、ここにいてもいいのですか。」と梶は訊たずねてみた。

「みなここの人は僕のことを知ってますよ。」

栖方は悪びれずに答えた。そのとき、また一人の佐官が梶の傍

へ来て坐すわつた。そして、栖方あいさつに挨拶して黙々とフオークを持つたが、この佐官もひどくこの夕は沈んでいた。もう海軍力はどこ  
の海面の全滅している噂うわさの拡ひろがっているときだった。レイテ戦  
は総敗北、海軍の大本山、戦艦大和も撃沈された風説が流れてい  
た。

珍らしいパン附の食事を終つてから、梶と栖方は、中庭の広い  
芝生へ降りて東郷神社と小額ほころのある祠ほころの前の芝生へ横になつた。  
中庭から見た水交社は七階の完備したホテルに見えた。二人の横  
たわっている前方の夕空にソビエツトの大使館が高さを水交社と  
競っていた。東郷小祠しょうしの背後の方へ、折れ曲つている広い特別  
室に灯が入つた。栖方は黄楊つげの葉の隙から見える後のその室を指

して、

「あれは少将以上の食堂ですが、何か会議があるらしいですよ。」と説明した。大きな建物全体の中でその一室だけ煌煌こうこうと明るかった。爽さわやかな白いテーブルクロスの間を白い夏服の将官たちが入口から流れ込んで来た。梶は、敗戦の将たちの灯火を受けた胸の流れが、漣さざなみのような忙しい白さで着席していく姿と、自分の横の芝生にいま寝そべって、半身を捻ねじ曲げたまま灯の中をさし覗のぞいている栖方を見比べ、大厦たいかの崩れんとするとき、人皆この一本に頼るばかりであろうかと、あたりの風景を疑った。一人の明めいせ皙きはんだん判断のない狂いというものの持つ恐怖は、も早や日常茶飯事の平静ささえ伴なっている静かな夕暮だった。

「ここへ来る人間は、みなあの部屋へ這入りたいのだろうが、今夜のあの灯の下には哀愁があるね。前にはソビエツトが見ているし。」

「僕は、本当は小説を書いてみたいんですよ。帝大新聞に一つ出したことがあるんですが、相対性原理を叩いてみた小説で、傘屋の娘というです。」

どういう栖方の空想からか、突然、栖方は手枕をして梶の方を向き返つて云つた。

「ふむ。」梶はまことに意外であつた。

「長篇なんですよ。数学の教授たちは面白い面白いと云つてくれましたが、僕はこれから、数学を小説のようになして書いてみ

たいんです。あなたの書かれた旅愁というの、四度読みましたが、あそこに出て来る数学のことは面白かったなア。」

考えれば、寝ても立ってもおられぬときだのに、大<sup>たい</sup>厦<sup>いか</sup>を支える一木が小説のことをいうのである。<sup>あわただ</sup>遽<sup>あ</sup>しい将官たちの往<sup>ゆ</sup>き来<sup>き</sup>とソビエツトに挟まれた夕<sup>ゆう</sup>闇<sup>やみ</sup>の底に横たわりながら、ここにも不可解な新時代はもう来ているのかしれぬと梶は思った。

「それより、君の光線の色はどんな色です。」と梶は話を反らせて訊<sup>たず</sup>ねた。

「僕の光線は昼間は見えませんが、夜だと周囲がぼつと青くて、中が黄色い普通の光です。空に上ったら見ていて下さい。」

「あそこでやっている今夜の会議も、君の光の会議かもしれない

な。どうもそれより仕様がなない。」

暗くなつてから二人は帰り仕度をした。携帯品預所で栖方は、受け取つた短剣を腰に吊りつつ梶に、「僕は功一級を貰うかもしれませんよ。」と云つて、元氣よく上着を捲くし上げた。

外へ出て真ツ暗な六本木の方へ、歩いていくときだった。また栖方は梶に擦りよつて来ると、突然声をひそめ、今まで抑えていたことを急に吐き出すように、

「巡洋艦四隻と、<sup>せき</sup>駆逐艦四隻を沈めましたよ。光線をあてて、僕は時計をじつと計っていたら、四分間だった。たちまちでしたよ。」

あたりには誰もいなかった。暗中<sup>あいくち</sup>に首を探ぐつてぐつと横腹

を突くように、栖方は腰のズボンの時計を素早く計る手つきを示して梶に云った。

「しかし、それなら発表するでしょう。」

「そりや、しませんよ。すぐ敵に分つてしまふ。」

「それにしても——」

二人はまた黙つて歩きつづけた。緊迫した石垣の冷たさが籠こみ冴さえて透とおつた。暗い狸まみあな穴の街路は静な登り坂になつていて、ひびき返る靴音だけ聞きつつ梶は、先日から驚かされた頂点は今夜だったと思つた。そして、栖方の云うことを嘘うそとして退けてしまふには、あまりに無力な自分を感じてさみしかった。いや、それより、自分の中から剥はげ落ちようとしている栖方の幻影を、むし

ろ支えようとしているいまの自分の好意の原因は、みな一重に栖方の微笑に牽引けんいんされていたからだと思つた。彼はそれが口惜しく、ひと思いに彼を狂人として払い落してしまいたかつた。梶は冷然としていく自分に妙に不安な戦慄せんりつを覚え、黒黒とした樹立こだちの沈黙に身をよせかけていくように歩いた。

「僕はね、先生。」とまた暫しばらくして、栖方は梶に擦りよつて来て云つた。「いま僕は一つ、悩んでいることがあるんですよ。」

「何んです。」

「僕は今まで一度も、死ぬということこわを恐つたことはなかつたんですが、どういふものだが、先日から死ぬことが恐くなつて来たんです。」

栖方の本心が眼覚めて来ている。梶はそう思つて、「ふむ」と云つた。

「何ぜでしょうかね。僕はもうちよつと生きていたいのですよ。僕はこのごろ、それで眠れないのです。」

深部の人間が揺れ動いて来ている声である。氣附いたたと梶は思つた。そして、耳をよせて次の栖方の言葉を待つのだつた。また二人は黙つて暫く歩いた。

「僕はもう、誰かにすがりつきたくつて、仕様がな。誰もいないのです。」

今まで無邪気に天空で戯れていた少年が人のいない周囲を見廻し、ふと下を覗いたときの、泣きだしそうな孤独な恐怖が洩れて

いた。

「そうだろうな。」

答えようのない自分がうすら悲しく、梶は、街路樹の幹の皮の厚さを見過してただ歩くばかりだった。彼は早く灯火の見える辻へ出たかった。丁度、そうして夕暮れ鉄材を積んだ一隊の兵士と出会った場所まで来たとき、はっらっ澆刺としていた昼間の栖方を思い出し、やっと梶は云った。

「しかし、君、そういうところから人間の生活は始まるのだから、あなたもそろそろ始まって来たのですよ。何んでもないのだ、それは。」

「そうでしょか。」

「誰にもすがれないところへ君は出たのさ。零ゼロを見たんですよ。この通りは狸穴たぬきといって、狸ばかり棲すんでいたらしいんだが、それがいつの間にか、人間も棲むようになって、この通りですからね。僕らの一生もいろんなところを通らねばならんですよ。これだけはどう仕様しやうもない。まア、いつも人は、始まり始まりといつて、太鼓でも叩たたいて行くのだな。死ぬときだつて、僕らはそうし為しようじゃないですか。」

「そうだな。」

漸ようやく泣き停とつたような栖方の正しい靴音が、また梶かに聞きえて来た。六本木の停留所の灯が二人の前へさして来て、その下に塊かたまっている二三の人影の中へ二人は立つと、電車が間もなく坂を昇

つて来た。

秋風がたつて九月ちかくなつたころ、高田が梶の所へ来た。栖方の学位論文通過の祝賀会を明日催したいから、梶に是非出席してほしい、場所は横須賀で少し遠方だが、栖方から是非とも梶だけは連れて来て貰いたいと依頼されたということで、会を句会にしたいという。句会の祝賀会なら出席することにして、梶は高田の誘いに出て来る明日を待った。

「どういふ人が今日が出るのです。」

と、梶は次の日、横須賀行の列車の中で高田に訊ねた。大尉級の海軍の将校数名と俳句に興味を持つ人たちばかりで、山の上に

ある飛行機製作技師の自宅で催すのだと、高田の答えであった。「この技師は俳句も上手うまいが、優秀な豪えらい技師ですよ。僕と俳句友達ですから、遠慮の要いらない間柄なんです。」と高田は附加して云った。

「しかし、憲兵に來られちゃね。」

「さア、しかし、そこは句会ですから、何とかうまくやるでしょう。」

途中の間も、梶と高田は栖方が狂人か否かの疑問については、どちらからも触れなかつた。それにしても、栖方を狂人だと判定して梶に云つた高田が、その栖方の祝賀会に、梶を軍港まで引き摺ずり出そうとするのである。技師の宅は駅から遠かつた。海の

見える山の登りも急な傾きで、高い石段の幾曲りに梶は呼吸がきれぎれであった。葛くずの花のなだれ下った斜面から水が洩れていて、低まっていく日の満ちた谷間の底を、日ぐらしの声がつらぬき透っていた。

頂上まで来たとき、青だいたいい橙だいだいの実に埋った家の門を這はい入った。そこが技師の自宅で句会はもう始っていた。床前に坐すわらせられた正客の栖方の頭の上に、学位论文通過祝賀俳句会と書かれて、その日の兼題も並び、二十人ばかりの一座は声もなく句作の最中であつた。梶と高田は曲縁の一端のところですぐ兼題の葛の花の作句に取りかかった。梶は膝ひざの上に手帖を開いたまま、中の座敷の方に背を向け、柱にもたれていた。枝をしなわせた橙の実の触れあ

う青さが、梶の疲労を吸いとるようであった。まだ明るく海の反射をあげている夕空に、日ぐらしの声が絶えず響き透っていた。

「これは僕の兄でして。今日、出て来てくれたのです。」

栖方は後方から小声で梶に紹介した。東北なまりで、礼をのべる小柄な栖方の兄の頭の上の竹筒から、葛の花くずが垂れていた。句会に興味のなさそうなその兄は、間もなく、汽車の時間が切れるからと挨拶あいさつをして、誰より先に出ていった。

「橙青たうき丘の別れや葛の花」

梶かじはすぐ初めの一句を手帖に書きつけた。蝉せみの声はまだ降るようであった。ふと梶は、すべてを疑うなら、この栖方せいほうの学位論文通過もまた疑うべきことのように思われた。それら栖方せいほうのして

いることごとが、単に栖方個人の夢遊中の幻影としてのみの事実で、真実でないかもしれない。いわば、その零ゼロのごとき空虚な事実を信じて誰も集り祝っているこの山上の小会は、いまこうして花のような美しさとなり咲いているのかもしれない。そう思っても、梶は不満でもなければ、むなしい感じも起らなかつた。

「日ぐらしや主客に見えし葛の花」と、また梶は一句書きつけた紙片を盆に投げた。

日が落ちて部屋の灯が庭に射さすころ、会の一人が隣席のものと囁ささやき交しながら、庭のま垣の外を見詰めていた。垣かきすそ裾へ忍びよる憲兵の足音を聞きつけたからだつた。主宰者が憲兵を中へ招じ入れたものか、どうしたものかと栖方に相談した。

「いや、入れちや不可<sup>いか</sup>ん。癖になる。」

床前に端座した栖方は、いつもの彼には見られぬ上官らしい威厳で首を横に振った。断乎<sup>だんこ</sup>とした彼の即決で、句会はそのまま続行された。高田の披講で一座の作句が読みあげられていくに随<sup>したが</sup>い、梶と高田の二作がしばらく高点を競りあいつつ、しだいにまた高田が乗り越えて会は終った。丘を下つていくものが半数で、栖方と親しい後の半数の残った者の夕食となったが、忍び足の憲兵はまだ垣の外を廻<sup>まわ</sup>っていた。酒が出て座がくつろぎかかったころ、栖方は梶に、

「この人はいつかお話した伊豆<sup>いず</sup>さんです。僕が一番お世話になっている人です。」

と紹介した。

労働服の無口で堅固な伊豆に梶は礼をのべる気持になった。栖方は酒を注ぐ手伝いの知人の娘に軽い冗談を云ったとき、親しい応酬をしながらも、娘は二十一歳の博士の栖方の前では顔を赧らめ、立居に落ち付きを無くしていた。いつも両腕を組んだ主宰者の技師は、静かな額に徳望のある気品を湛<sup>た</sup>えていて、ひとり和やかに沈む癖があつた。

東京からの客は少量の酒でも廻りが早かつた。額の染つた高田は仰向きに倒れて空を仰いだときだつた。灯をつけた低空飛行の水しほ機が一機、丘すれすれに爆音をたてて舞つて来た。

「おい、栖方の光線、あいつなら落せるかい。」と高田は手枕<sup>てまくら</sup>

のまま栖方の方を見て云った。一瞬どよめいていた座はしんと静まった。と、高田ははつと我に返つて起きあがつた。そして、厳しく自分を叱しつせき責する眼付きで端座し、間髪を入れぬ迅はやきで再び静まりを逆転させた。見ていて梶は、鮮かな高田の手腕に必死の作業があつたと思つた。襯衣シャツ一枚の栖方はたちまち躍るようたのに愉しげだつた。

その夜は梶と高田と栖方の三人が技師の家の二階で泊つた。高田が梶の右手に寝て、栖方が左手で、すぐ眠りに落ちた二人の間に挟まれた梶は、寝就ねつきが悪く遅くまで醒さめていた。上半身を裸体にした栖方は蒲団ふとんを掛けていなくつた。上蒲団の一枚を四つに折つて顔の上に乗せたまま、両手で抱きかかえているので、彼の

寝姿は座蒲団を四五枚顔の上に積み重ねているように見えて滑こっけ稽いだった。どういふ夢を見ているものだろうか、夜中ときどき梶は栖方を覗のぞきこんだ。ゆるい呼吸の起伏をつづけている臍へその周囲のうすい脂肪に、鈍く電灯の光が射していた。蒲団で栖方の顔が隠れているので、首なしのようにみえる若い胴の上からその臍が、

「僕、死ぬのが何んだか恐こわくなりました。」と梶に呟つぶやくふうだった。梶は栖方の臍も見たと思って眠りについた。

梶と栖方はその後一度も会っていない。その秋から激しくなつた空襲の折も、梶は東京から一步も出ず空を見ていたが、栖方の

光線はついに現れた様子がなかった。梶は高田とよく会うたびに栖方のことを訊ねても、家が焼け棲家のなくなった高田は、栖方についてはもう興味の失せた答えをするだけで、何も知らなかった。ただ一度、栖方と別れて一ヶ月もしたとき、句会の日の技師から高田にあてて、栖方は襟章の星を一つ附加していた理由を罪として、軍の刑務所へ入れられてしまったという報告のあったことと、空襲中、技師は結婚し、その翌日急病で死亡したという二つの話を、梶は高田から聞いただけである。栖方と同じ所に勤務していた技師に死なれては、高田もそこから栖方のことを聞く以外に、方法のなかったそれまでの道は断ちきれたわけであった。随したがつて梶もまたなかった。

戦争は終わった。栖方は死んでいるにちがいないと梶は思った。どんな死に方か、とにかく彼はもうこの世にはいないと思われた。ある日、梶は東北の疎開先にいる妻と山中の村で新聞を読んでいるとき、技術院総裁談として、わが国にも新武器として殺人光線が完成されようとしていたこと、その威力は三千メートルにまで達することが出来たが、発明者の一青年は敗戦の報を聞くと同時に、口惜しさのあまり発狂死亡したという短文が掲載されていた。疑いもなく栖方のことだと梶は思った。

「栖方死んだぞ。」

梶はそう一言妻に伝って新聞を手渡した。一面に詰った黒い活字の中から、青い焰ほのおの光線が一条ぶつと噴きあがり、ばらばらッ

と砕け散って無くなるのを見るような迅さで、梶の感情も華ひらいたかと思うと間もなく静かになっていった。みな零になったと梶は思った。

「あら、これは栖方さんだわ。とうとう亡くなったのね。一機も入れないって、あたしに云ってらしたのに。ほんとに、敗まけたと聞いて、くらくらツとしたんだわ。どうでしょう。」

妻のそういう傍で、梶は、栖方の発狂はもうすでにあのときから始っていたのだと思われた。彼の云ったりしたりしたことは、あることは事実、あることは夢だったのだと思つた。そして、梶は自分も少しは彼に伝染して、発狂のきざしがあつたのかもしれないと疑われた。梶は玉手箱の蓋ふたを取つた浦島のように、呆ほうツと

立つ白煙を見る思いで暫く空を見あげていた。技師も死に、栖方も死んだいま見る空に彼ら二人と別れた横須賀の最後の日が映じて来る。技師の家で一泊した翌朝、梶は栖方と技師と高田と四人で丘を降りていったとき、海面に碇泊していた潜水艦に直撃を与える練習機を見降ろしながら、技師が、

「僕のは幾ら作っても作っても、落される方だが、栖方のは落とす方だからな、僕らは敵いませんよ。」

悄然として呟く紺背広の技師の一步前で、これはまた澆

刺とした栖方の坂路を降りていく鰐足が、ゆるんだ小田原

提灯の巻ゲートル姿で泛んで来る。それから三笠艦を見物して、

横須賀の駅で別れるとき、

「では、もう僕はお眼にかかれなれないと思えますから、お元気で。」  
はつきりした眼付きで、栖方はそう云いながら、梶に強く敬礼した。どういう意味か、梶は別れて歩くうち、ふと栖方のある覚悟が背に沁しみ伝わりさみしさを感じて来たが、——

疎開先から東京へ戻つて来て梶は急に病氣になった。ときどき彼を見舞いに来る高田と会つたとき、梶は栖方のことを云い出してみたりしたが、高田は死児の齡よわいを算かぞえるつまらなさで、ただ曖あ昧まいな笑いをもらすのみだった。

「けれども、君、あの栖方の微笑だけは、美しかったよ。あれにあうと、誰でも僕らはやられるよ。あれだけは——」

微笑というものは人の心を殺す光線だという意味も、梶は含め

て云つてみたのだった。それにしても、何よりも美しかった栖せいほ方うのあの初春のような微笑を思い出すと、見上げている空から落ちて来るものを待つ心が自ら定つて来るのが、梶かじには不思議なことだった。それはいまの世の人たれもが待ち望む一つの明めい哲せき判はん断だんに似た希望であつた。それにも拘かかわらず、冷笑するがごとく世界はますます二つに分れて押しあう排中律のさ中にあつて漂いゆくばかりである。梶は、廻かいてん転てんしている扇風機の羽根を指差しぱつと明るく笑つた栖方が、今もまだ人人に云いつづけているように思われる。

「ほら、羽根から視線を脱はずした瞬間、廻まわつていることが分るでしょう。僕もいま飛び出したばかりですよ。ほら。」





# 青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「定本横光利一全集」河出書房新社

1981（昭和56）年～

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2003年6月12日作成

2013年10月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 微笑

横光利一

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>